

人権同和教育調査研究委員会

一 テーマ

世の中にある、あらゆる差別を自分事として捉え、主体的に解決する意欲と実践力を養うために、人権同和教育をどのように進めていったらよいか。

二 テーマ設定の理由

子どもたちが、人権が尊重される社会づくりを自らの問題ととらえ、自ら考え行動していけるようになるために、人権同和教育を効果的に行いたい。それにはまず、学習教材を選定・開発する必要があると考える。

三 研究の過程

- 5月21日（木）第1回委員会 年間計画・テーマ検討
- 8月25日（火）委員各自（校）の研究・実践の持ち寄り、研究①
- 11月13日（金）委員各自（校）の研究・実践の持ち寄り、研究②
- 1月14日（木）研究内容のまとめ①と発表の打合せ
- 1月21日（木）研究発表会・まとめ②

四 研究の内容

- 1 児童・生徒が、自分自身や、身近な学級・学校や家庭・地域社会と結び付けて考えられるような課題設定のありかたについて考える。
- 2 『あけぼの』改定（令和2年）に向けて、新たな人権課題や学習素材について、実践のための研究を行う。

三 研究のまとめと課題

1 課題設定のありかたについて

新型コロナウイルスという未知なる現象により、この感染症への不安や恐れからなるさまざまな差別事象の中に身を置いていると実感する毎日。このような経験をどのように説明し、乗り越えていくのか。新型コロナウイルス感染症にまつわる差別を学ぶことは、社会全体の課題として必要であり、まさに今「自分事」として主体的に学ぶことのできる、絶好の教材であるとも言える。今年度本委員会では、新たな実践として必要感をもって、この新型コロナウイルス感染症にまつわる人権問題に取り組んだ。なお、特設的に授業研究という形態は取らず、日常の子どもたちのつぶやきや身近にある事例などを基に、委員全員が一から授業づくりを行った。

(1) 清水和先生の実践（小5）

「差別はよくない」と言いながら、もし友達が感染したら「距離を置く」「近づかない」という意見もありました。風邪で欠席する子がいると、「コロナじゃねーの？」という声が上がることがありました。見えない、わからない「コロナ」の恐怖に身を置く中で、きれいごとでは済まされない、子どもたちの本音が見えました。子どもたちから発せられる差別的とも言える発言について、教師としてどんな言葉を子どもたちにかけていけばよいのか。時には、声を荒げて感情をぶつけてしまうこともあります。それで本当の解決につながるのか。そんな悩みの日々でもありました。

(2) 宮下尊教先生の実践（小2）

子どもたちに「コロナ」に対してどのように感じているか問うと、感染状況の拡大や、「世界の誰か」ではなく「友だち」「家族」などが感染したらと考えたときに、身近になればなるほど「かわいそう」から「嫌だ」「怖い」という思いが強くなってきた。このような気持ちが強く大きくなると「いじめ」や「差別」につながることに気が付き、優しくしなければいけないと頭では分かっているが、

「やっぱりできないかも」と葛藤している子どもたち。死の恐怖とも結びつくコロナ感染に対して、嫌だ、死にたくないという感情を持つことは仕方ないことである。このような子どもたちに、どのような言葉をかけてあげればよいのか、「大丈夫」と言ってあげられる材料が今の私にはない。身近に関わっている大人や、メディアなどの環境も、子どもたちの偏見や差別につながる言動や恐怖心を助長するなど、影響を与えるのではないかと思われる。

(3) 吉池祐子先生の実践（小3）

佐久市の「コロナ食堂」への誹謗中傷と励ましを題材として、見えない敵「コロナウイルス」に関するいじめや差別について考え、自分の行動を振り返らせた。子どもたちは様々な角度から、自分たちの生活と結び付けて考えられていた。「コロナ」という言葉を出した瞬間、「こわい」とつぶやく子もいた。素直なつぶやきを拾って、考えを深めさせていきたい。

(4) 山下妃世の実践（中2）

8月末、「病気」→「不安」→「差別・偏見」という、この感染症の“負のスパイラル”を断ち切るにはどうすべきか、日本赤十字社の動画や資料をもとに、仲間と意見交換したりしながら考えさせた。授業後の感想を、このように書いた生徒がいた。

今この時期で新型コロナウイルスが流行っている中、もしも自分がコロナウイルスに感染してしまったら、友達はどうのように相手をしてくれるか不安だったけど、今回の授業でみんなは、コロナに感染した人に差別をしないということがわかって、自分も安心したし、もし逆に友達が感染してしまったら、差別するのではなく優しくできるようになりたいと思いました。あと、自分が感染しないように手洗いや消毒をしたり、感染対策をしていきたいなと思いました。

新型コロナウイルス感染症についての知識が増え、仲間とともに学び合えたことに自信をもてた様子が伝わった。「安心」や「信頼」を周囲に感染させることを願い、学級通信で紹介した。感染しても安心できる環境が、感染症拡大防止に必要で、皆が望んでいることだと実感した。

4ヶ月後、青木村でも「コロナ」が身近になった。休校の期間を経て、子どもたちが不安や悩みを抱えて登校するだろうかと、登校再開初日は正直心配だった。しかし、集まった子どもたちの表情は明るく、以降もこれまで通り穏やかに過ごしている。「感染しても安心できる」仲間や学校に近づけたと感じている。また、コロナ差別について注意喚起し続けてきた村の力も大きいと感じている。

2 来年度改定される『あけぼの』実践のための研究について

今年度は「コロナ差別」のみについて実践研究を行った。来年度は、新しい『あけぼの』の題材を分析し、新たに実践したことを研究・発信したい。

五 研究のまとめと課題

- 1 未知なるウイルスが怖い、避けたいと思うのはごく自然なことで、そこから学習が始められる。まずはそのような子どもたちの本音を引き出し、受け止められることが大切である。
- 2 「コロナ」の恐怖や不安から自分を守り、安心感を得るために、人を攻撃したり差別したりする「こころの仕組み」に気づかせていくことで、自分にも、誰にでもある差別心を「自分事」として捉え、差別解消に向けて行動しようとする姿につなげていく。
- 3 新型コロナウイルス感染症にまつわる差別は、まさに今、いやがおうにも「自分事」として捉えられる人権課題であり、人の心にある「差別心」を実感することができる教材である。今後、その他の差別事象を学ぶときにも、児童・生徒達の生活の中でも、この学習が生きてくると思われる。

六 委員名簿

推進係 中村弘文（中塩田小） 委員長 山下妃世（青木中） 副委員長 吉池祐子（長門小）
会計 宮下尊教（南小） 記録 清水 和（丸子中央小）